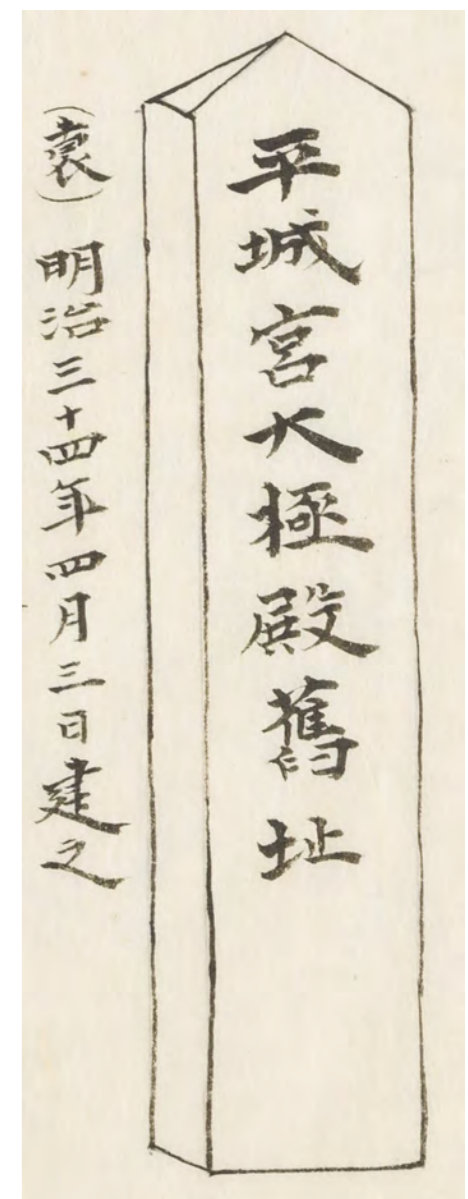




平城宮跡資料館令和三年度春期特別企画展『平城宮跡保存運動のさきがけ』配付資料



▲ ①・②標木（溝辺文昭氏所蔵）



▲ ⑬標木の見取り図
(岡嶋良男氏所蔵『平城宮大極殿旧址建標録』より抜粋)



▲ ⑤大極殿上の標木の古写真（奈良県立図書館蔵）

平城宮跡保存運動のさきがけ
— 大極殿標木建設式 120 周年 —
会場：平城宮跡資料館（入館料無料・駐車場無料）
会期：2021年4月29日（木）～5月30日（日）
【主催】独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
【後援】文化庁、奈良新聞社

古の奈良

平城宮大極殿遺址考

關野 貞

回顧すれば昨年一月二十一日の事なりき。藤原朝書記官及藤本參事官と與に近郊に散策を試みしとき平城宮大極殿の遺址を捜らばやど數々之を農夫に問ひ其指示せし所の大黒の芝と稱する處に至り詳かに附近の形勢を觀察せしに此大黒の芝と稱へらるるは田面より高さ六尺許の芝地に於て往時大殿のありし所と充分認むるを得べく更に小安殿、龍尾道及其南庭の十二堂、應天門、步廊等の遺址の明かに殘存せるを見るに及びては轉た當時の規模の盛大なりしに驚き而して其跡跡の永く埋没して一人の之れが探究を勉めたりし者なかりしを悲みたりき。

大極殿は其正殿なり其位置は生駒郡都跡村大字佐紀の内小字神明野、中神野野及大頭の一部分田の小部分を占め北朝の北、塊梅天神の森の西方に當れる所今左に院内殿堂諸門廊等の遺址を細説せん。

◎開門(京都内裏の應天門)の遺址 奈良市の三條通りを一直線に西に進みて佐保川に架せる高橋を渡り四町許りにして北方に近く一小村を竹樹叢生の間に認むべし是れ即都跡村大字北新なり村の北に一條の小路あり東西に貫通す即ち昔時平城京の二條大路の殘影にして東の方奈良市の油留木の通りに蜿蜒として連絡す村の後此小路を距ること凡七十間許り水田中に小なる芝地あり是れ即開門の遺址にして今猶瓦片の累積せるを見る。

當時二重の樓門巍然として立ち歩廊其左右に起り以て宏壯なる朝堂院の正門となしたりしもの今や空しく一堆土を餘すのみ誰れか今昔の感なからんや。

◎步廊の遺址 開門の遺址の左右に一條の小徑あり東西に延ぶること各四十五六間折れて北行すること二百七拾間更に一小道ありて東西に連結す是れ四面步廊の遺址にして其内部は朝堂院の敷地なり。

◎中門(京都内裏の會昌門)及左右步廊の遺址 前記廣き田面の北方に當り更に一條の小徑東西に亘れるを見る是蓋し中門及左右步廊の遺址なるべし朝堂院の内部は此門廊にて式場の内外を別たりしなり。

◎十二堂の遺址 中門及步廊の遺址の北再廣き前者に數倍せる田面の中恰も島嶼の基布せるが如く其地の存在するを見るべし是れ龍尾道南庭の十二堂の遺址なり。

十二堂とは大禮の時親王以下百官の位次により參列着座する所なり此等の内遺址の存在せる圖面に示すが如く南面順章、永寧、修式の三堂東面明禮、承光、合章、昌福の四堂西面延祿、含嘉、延休の三堂にして總て九堂なり而して破壞せられたりしは僅かに康樂、顯章の二堂址に過ぎず遺址は何れも高三四尺許りの芝地にして整然並列し瓦礫累々雜草之を覆へり。

◎龍尾道の遺址 十二堂址のある所を過



(圖中黒線セルハ殘存セル芝地點線ハ形跡ヲ失ヒタル部分)

一康樂堂
二順章堂
三永寧堂
四修式堂
五明禮堂
六承光堂
七合章堂
八昌福堂
九延祿堂
十顯章堂
十一含嘉堂
十二延休堂

今此遺址を説くに先ち當時存在したるし殿堂門廊等の名稱を歴史上に需むるに唯朝堂、大極殿、開門、南門、步廊、南院、朝集堂等の記事あるを見るのみ蓋し其規制に於ては京都内裏の者と大差なかりしを應天門、會昌門其他十二堂の名稱の如きは未だあらざりしなるべし然れども其位置の相當せるより茲には便宜此等の名稱を併り用ふることあるべし讀者之を諒せよ。

◎朝堂院 朝堂院とは天子即位、元朝、御會等の大禮を擧げらるる所の式場に

◎朝集堂の遺址 開門の遺址を過ぐるときは廣き田面あり是れ東西に朝集堂の立ちし處なり朝集堂とは百官待朝の處即ち溜所なり其遺址は破壊されて今は悉く水田となり唯東方に小なる芝地を見るは或は其餘影なるべしか現今唐招提寺の講堂は同寺創立の際此朝集堂の一を賜はりたる者傳へらる。

更に北に進むときは前方の田面更に一段をなせるを見る是れ蓋し龍尾道の遺址にして昔時は石階數級朱欄繞繞以て式場を上下の兩段に別ち君臣尊卑の別を明かにし莊重森嚴の呈したりし所なり。

◎大極殿の遺址 龍尾道の北は再び廣き田面にして正面には高さ田面を抜くこと六尺東西二十一間南北七間の大なる芝地あるを見るは其上は荒蕪の地に枯草蕭條瓦石磊落心なき農夫が作りし番小屋の裡には焚火の餘灰を遺し僅かに殘存せし礎石は悉く掘り起されて凹山の痕跡かに荒廢無名狀すべからず是れ即嘗て朝堂院の正殿として 天子屢臨御國

家の大禮を行はれ特に 元正天皇は茲に登極の恒例を開き玉ひ 聖武天皇以下の五帝が續いて即位の大典を擧げ玉ひたる大極殿の遺址なり昔時は十一間四面單層四注の大建築巍々乎として此に立ち朱極聖壁輪奐の美を極め青嶺金當莊嚴の光を放ち白石は基礎を築み鷗尾は屋蓋に聳へ内には高御座を設け外には大櫓檜を樹つ龍尾壇上は非重なる儀式を擧ぐる處壇下十二堂は金紫燦爛たる百官の侍座する處中門外は東西朝集堂相對峙し更に重閣門の峨々として中外に臨めるあり四面には步廊長く繞りて樓門高く時時規模の宏壯なる制度の森嚴なる一たび此遺址の上

見て俯仰感慨の情に勝へざるなり此芝地今猶大黒の芝又は大黒殿の俗稱あり蓋し大黒は大極殿の轉訛なるべく益遺址の正確なるを徵証するに足れり。

◎小安殿の遺址 大極殿の遺址の北に小なる芝地あり是れ 天千大極殿に臨御の時便殿に充て玉ふ所の小安殿の遺址なり此小安殿の遺址の北方に小なる小路蓋し北面步廊の殘影にして北門(京都内裏の昭慶門)の立ちし所なり。

以上吾人は今日に殘存せる朝堂院の遺址を説明したり京都内裏にありし樓閣、環、鸞、龍、白虎等の樓閣は此にもありたりしならんも今は之を徵証するの形迹を見ざるは遺憾の至りなり。

平城宮朝堂院の制度の京都内裏の者と安と徑庭するなかりしは以上説く所により明かなり然るに後世歴史の充滿ある跡の現存するなくんは誰れか其真相を密かにせんや京都の大極殿の遺址に石を立て之を表せりと雖も殿堂門廊の形は悉く埋没して其一班をも見ることは不能又平安堂都紀念祭の時構造したる紀念殿は朝堂院の模造なれども應天門を立て其左右の步廊及樓閣鳳鸞の二樓を省き更に天門以内龍尾壇に至るまでの十四堂一門を略し直ちに大極殿に接し且著しく建物寸尺減縮したるを以て往昔の壯觀を見るべからず若し夫れ昔時の宏大なりし大極殿の規模を識らんと欲する者は須く來りて我平城宮朝堂院の遺址を觀るべしへかざるなり然るに從來一人の之を表彰しに勉めたる者なく空しく荒廢に委して顧みず甚しきに至りては先年牛疫流行の際南苑宮殿の遺址を病牛の燒棄處に充てたりしことあり其標柱と殘灰とが今猶遺蹟汗漬の紀念として存するを見るなり是の如きこと畢竟跡跡の湮滅して明かならざりしに由る是豈我大和國の名譽ならんや吾人は實に其遺址の一日も早く表彰せられ保存の實の擧らんことを熱心に希するものなり。